

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	西丸純子
2. 審査委員	主査：（上越教育大学准教授）松尾大介 副主査：（上越教育大学教授）松本健義 委員：（上越教育大学教授）押木秀樹 委員：（岡山大学教授）清田哲男 委員：（上越教育大学准教授）伊藤将和
3. 論文題目	青年期の深い鑑賞体験における言語と身体の間わりについての研究
4. 審査結果の要旨	<p>論文提出による学位申請者 西丸純子氏 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：令和2年8月8日（土） 15時00分～16時00分 実施方法：オンライン（ZOOM）による審査会</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>○学位論文の構成は以下のとおりである。</p> <p>序章 問題の所在と研究の動機，研究の目的と方法，本論文の構成</p> <p>第1節 問題の所在と研究動機</p> <p>第2節 研究の目的</p> <p>第3節 先行研究の検討</p> <p>第4節 研究の方法</p> <p>第5節 本論文の構成</p> <p>第1章 鑑賞活動における言語</p> <p>第1節 身体を媒介とした<ことば>の敷き写し</p> <p>第2節 表象世界と視点移動</p> <p>第3節 本源的対話による言語活動</p> <p>第2章 本研究の美術科教育的位置づけ</p> <p>第1節 美術科教育における「追創作」的鑑賞</p> <p>第2節 追创作的鑑賞</p> <p>第3節 N. ハルトマンの述べる描写芸術の多層性</p>

第3章 作家と中学生との手紙を通した〈ことば〉の敷き写しの実際と経験の更新

第1節 国語教師村上通哉の言語活動を媒介とし、作家の文章、直筆、絵画に描かれた実景などを介在させた教育実践の実際

第2節 主題理解と対話構造の関係

第4章 「精神の同質性」を形成する直接的な身体性の対話

第1節 彫刻家安藤榮作と高校生との交流の場を創る教育実践の実際

第2節 人間形成の過程と表象世界の敷き写し

終章 研究のまとめ

○本論文の概要は以下のとおりである。

本研究は、国語教師村上通哉による日本画家東山魁夷を招いた実践と、筆者による彫刻家安藤榮作を招いた実践を検証し、表象を介して深い体験を伝え合う創作者と青年期の生徒の実際の様相を明らかにしたものである。自己の分節化に悩む青年期において、分節される前の自己を還元的に自覚する「対話」の重要性を示した本研究は、美術科における広義での言語活動の充実に位置付けられ、自己や他者の尊厳を自覚する教科内容に資するといえる。

第1章では、身体と身体による本源的な「対話」から、〈私的世界〉の成立までを概観している。

第2章では、深い鑑賞体験と同意の「美的体験」の享受について、金子の述べる「作者が作品中に設定・体験したイメージの論理に沿って、鑑賞者も体験する」という「追創作」と定義し、検証している。その際、「美的体験」を創作と享受から分析したハルトマンの論を援用している。ハルトマンによれば、芸術が実在的な前景と非実在的な背景の二層に分けられ、さらに、背景の奥行には、第Ⅰに物的、第Ⅱに生命的、第Ⅲに心的、第Ⅳに普遍的な層（精神的な層）の多層性がある。これらの層は、創作者と鑑賞者の「精神的同質性」に応じて異なる現れ方を示す。以上の理論と照らし、第3、4章では、創作者と鑑賞者の身体と身体がいかなる層で重なり合うのか、また背景の層を現象させる「精神的同質性」の実際の様相を追っている。

第3章では、中学生を対象に東山の水墨画を題材にした村上の実践について検証している。まず、村上自身の青年期における鑑賞体験に着目し、その鑑賞を、実在的な前景層の知覚から精神的な層へ接続することで、〈声＝情動の世界〉の主を同型的な存在として立ち上げて〈ことば〉が敷き写された体験として認めている。そして、その体験に裏付けられた村上の実践を以下、段階的な四つの対話を経たものとして明らかにしている。

i) 自らの思いを伝え合う対話として、志向性を持つ手紙という媒体による作家と生徒との交流。

ii) 作家の視点と重ねあわせ追体験する対話として、東山の文章を読み、「花」や「月」への視点移動から「花になる」「月になる」という対象への同化により、幻想的な世界に没入した後、再び第三者として前景から観る作家の視点と重なっていった。

iii) 作家の直接的な身体性が鑑賞者側に浸透する対話として、東山の直筆と向き合い、筆圧や筆勢・間・息遣いなどの直接的な身体性が敷き写された。

iv) 多様な視点の移動と重層化により、対象と同化した自己を省察する対話として、まず、東山の水墨画の中に「吸い込まれそう」という表象世界への身体的一体化。併せて、作家に会った経験から、東山の「やさしさ」が、絵の物的な層を透過して心的に作用する背景層への侵食。そして「あの作品」が「私を励ます」という、新たな〈自他二重性〉〈自我二重性〉を経て〈私

的世界>が拡大していった過程を確認している。その中でも「吸い込まれそう」という「溶解体験」を、深い鑑賞体験の中心に挙げている。

さらに、i)～iv)の生徒たちの体験が、修学旅行や植樹という生活の別な文脈で適用されたことで、鑑賞体験が異なる見方や感じ方の他者との対話を通じて意識化された意義を確認している。村上による一連の実践について、体験を省察し適用するコルプの学習の深化とも適合する点を指摘し、東山絵画を貫く主題である「風景と自己のつながりに目覚めた充足感」の本質的理解に迫る活動として認めている。

第4章では、「精神的同質性」を形成する対話の実際の様相について、彫刻家安藤榮作と高校生との交流実践を検証し、以下の内容を明らかにしている。

作家による斧のリズムなどを同型的に写しながら、素材と向き合い、作り変える楽しさという作家と同質の追創作体験。クマンバチの出現という想定外の出来事を経て、固定的な枠組みは揺さぶられ、作家の背景IV層である「未知の世界」に接続する体験。「斧をふるう行為」を素材や環境との一回限りの接触と、その連続を通じた作品の生成過程として体験。

美術の世界から遠い生徒も、素材や環境を通じて作家と関わり「精神的同質性」を形成しながら、有用性の秩序とは別の作家の意味世界に接続し、安藤の本質的主题に繋がる<ことば>が敷き写された実際を明らかにしている。

以上の考察により、青年期において、作品の背景に接続する鑑賞体験の意義について整理している。特にノエマ的自己の成熟とノエシス的自己の発現に伴う「自己同一の危機」である思春期にとって、表象の世界と一体になる体験は、ノエシス的自己が対象と同化する主客未分の言語化し難い経験であることを指摘している。そして、この言語的未分化の世界を他者と伝え合う本源的な対話こそが、別個の身体という物質層を越えた互いの「ノエシス性」への接続であり、自らの「ノエシス性」を自覚し、<私的世界>をつくり変えるものとして結論付けている。

2. 審査経過

(1) 独創性

新しい学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が求められ、アクティブラーニング等の導入が行われているが、学びの「深さ」を実現する具体的手立てについては、多様なとらえ方があり、特に美術教育においては、明示し難い現状である。本研究では、歴史的な日本画家である東山魁夷を招いた国語教師村南通哉の実践と、日本を代表する彫刻家安藤榮作を招いた筆者の実践について検証し、手紙や作品などの表象を介して体験を伝え合う創作者と青年期の生徒の実際の様相を追うことで、お互いの経験を作り変えていく鑑賞活動の本質的な構造を明らかにした点に本研究の独創性が認められる。

(2) 発展性

加速度的な今日の技術革新によって、ますます間接的かつ受動的な媒体に囲まれていく青年期の生徒にとって、本論で扱った身体的実感を伴う多様な立ち位置から他者の視点と重ね合わせていく対話を組み込んだ鑑賞活動は、他者や外界との現実に結びついた「内なる他者」の形成を豊かにするものである。また、教科固有の見方・考え方に基づいた作品の本質的な主題理解と人間理解との共通な構造を明らかにした本研究は、人間形成を目的の中心とした美術科教育の推進に資すると言える。

(3) 学校教育の実践への貢献

本論は、教師自ら表象を介して主体的・対話的に他者や社会とかかわることによって構築された教師・作家・生徒とのインタラクティブな関係性において実践を展開し、鑑賞活動の体験を生徒それぞれの生活に適用させた実証的研究である。本研究で実証された鑑賞活動の対話構造は、教師自ら教科内容の研究を深めつつ、社会への広がりを見据えた美術科の題材を開発していく方策を教育現場に示すものである。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、西丸純子氏の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するのに相応しい内容であると判断し、全員一致で合格と判断した。ただし、用語の定義については、整理の必要性が指摘されたため、修正、加筆することが確認された。